

論壇

今、農学教育研究の現場では・・・

天野 洋

京都大学農学研究科

「研究者を目指せ」と言い続けて・・・

長い間、疑うことなく学生達に言ってきたこの言葉の重さに、今は自身が耐えきれなくなる時があります。法人化された旧国立大学で顕著な、正規の若手研究者（教員）募集枠の激減。少し揺り戻しの傾向は認められますが、全体量は依然低い水準を推移し、そこかしこにポストドクターがあふれています。

私の元を巣立っていった、それも、若者と言うには今や戸惑いも感じられる年齢になった卒業生の彷徨姿は痛々しく、この国の遠い未来だけでなく近い将来を憂います。少し機に敏な者は日本学術振興会等の PD を戦術的に勝ち取り、一時の身分的な「安全」を身につけますが、決して「安心」は保証されず、すぐに「次」を探す日々を追われる毎日です。

職場では、朝一番に PC をつけ、メールとネットでたっぷりと「情報」を入手し、一瞬の「安心」を身にまとい、この鎧で今日一日をガードするのです。周りの親切な先輩方からは、毎日のように「ペーパー（論文）」「インターナショナル（国際性）」「アプリケーション（出口）」などのサジェスションが・・・。そして、彼／彼女らは忠実に先輩の助言に従い、隙間の科学を見つけだして業績の蓄積に邁進する。こうして多くの「小科学」が誕生する構造が完成します。2009年7月、福岡伸一が書き下ろした「世界は分けてもわからない」（講談社現代新書）を本屋か amazon で、または仲間から聞き及び、その内容に少し複雑な心境にはなるが、今更どうにもならないので、見て見ぬふりをする。

私たち教育研究者が学生・若手研究者に求めた姿と・・・何かが、何処かが違います。しかし、本質的に違ったのは、私たち自身かもしれません。教育研究の現場に、「申請書」「評価」「インパクトファクター」「サイテーションインデックス」などのキーワードの氾濫を許し、「鳥の目」を失いつつある私たちかも

知れません。こんな指導者を日常的に見続けた若手に、いまさら何を私たちは求められるのか……。文部科学省の関係者が、平成14年度から始まった21世紀COE (Centers of Excellence) を表したコメント「こんな(少)額で、大学がこれほど踊って(意識!)下さるとは……。この事業は、費用対効果が素晴らしかった……。」に言い表されています。もちろん、一連の法人化の時期で、他省庁も同様な構造の競争的資金を増やした事は言うまでもありません。いままで、評価文化のかけらもなかった(科学研究費補助金など制度はあったが熟成とは言い難い)我が国に、突如として評価の御旗が立ちました。評価作業を苦手とする私にさえ、このような機会が回ってくるほど人材不足の分野であります。こうして、教育研究の現場における持続性はもろくも崩れ去り、その影響をもっとも被ったのが、若手研究者支援策であり、農学教育研究であったのではないのでしょうか。なぜなら、いずれも単純な競争とは相容れない原理である「持続性」を基盤とする施策・科学であるべきだからです。

農林水産業と農学若手研究者の行く末

第1次産業が第2次・第3次産業と決定的に違うのは、ほとんどの従事者に「定年」「引退」が無いことです。その意味では、第1次産業は「職」というより「生き方」なのかも知れません。その現場に他産業の論理や「小科学」的な競争原理原則を導入しても、産業の活性化が保証されるとは思えません。第1次産業に深く関わる教育研究に就く私たちに必要なのは、まず私たち自身が「定年」「引退」に象徴される世界観から脱して、「生き方」としての農学(研究)を希求し、農家・農村圏とつき合い、彼らから信頼を得ること。そして若手研究者をその輪の中に引き込む事ではないのでしょうか。もちろん、これら全体を支援するプログラムを省庁は企画の中核に配置して欲しいと思います。このままでは、農学教育研究の基盤や裾野は簡単に崩れ去り、多くの能力ある若手人材が社会の隅に埋没し、やがては社会の世話に頼る生活にならないとも限りません。

そこで、私(たち)の模索は……

世代のギャップ、研究費の激減、時間の絶対的な不足……。あげれば後付けの原因はきりが無いでしょうが、これでは展望は開けません。では、出来ること

は何でしょう？ 試行錯誤の末に、私は「教育研究の原点に立ち返る」ことにしました。大学人として、学生個々が秘める将来に対して多様性を持った未来像を描き、提示し、十分な時間を共有して相談に応じ、必要な指導をする。そのためには、まず時間を作り出す事が必要でした。

覚悟して、周囲の反対を押し切って新天地を求め、2009年4月幸運にも転職が叶いました。マネジメント分野からの10数年ぶりの帰還と言えます。与えられた地で、私は自身の生活基盤と生活様式を単純化し、時間を生み出す工夫をし、教育研究にかけ得る機会と時間を最大にする努力をしています。単にライフスタイルの単純簡略化だけに留まらず、講義・申請書類・論文に及ぶまで出来る限りの単純化・本質化を目指しています。これは、農家の方々が生まれながらに持つ生き方に通ずるものかも知れませんが、古在豊樹氏が本アカデミー会報にも書かれた「農的生活」なのかも知れません。単純化の先に持続性を見いだしています。こうして生み出された時間は驚くべき量でした。その時間を教育研究へ振り分ける。一種の私的事業仕分けと言えます。

時間を共有した若い人財の鏡となればと思います。悲喜こもごもの研究者の「生き方」を銜いなく見せたうえでも、やはり「研究者を目指せ」と言い続けられる自分でありたいし、そのような現場から国と世界を救う次世代の農学人財は育つと考えています。